

変わりゆくパリ

伝統の中に斬新なアイデアが息づく
パリの街の魅力を定年後の滞在を通して
紹介します。

川村学園女子大学名誉教授
佐藤浩子

定年後、パリに暮らして

パリでの暮らしは、ソルボンヌ大学に留学したときに遡ります。その後も多くの機会に恵まれましたが、定年後、3回パリに滞在しました。

- ▶2016年から2017年の1年余り
- ▶2019年から2020年の半年
- ▶2023年秋に2か月

1. パリ2区に住んで

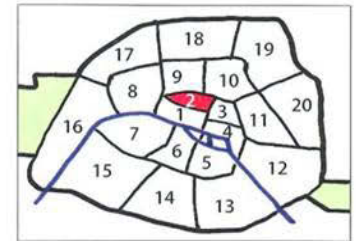
パリは20区から構成されています。

その真ん中を東から西へ流れるセーヌ川によって、北側の右岸と南側の左岸に大きく分かれます。私たちが3回住んだ右岸の2区は、パリのほぼ中心にあります。

レオミュール通りのアパルトマン、いくつかの通りとパレ・ロワイヤルを紹介します。

・パリ20区と2区の地図

■ 二区の通り・建物



- | | |
|----------------|------------------------------|
| ①オペラ大通り | ⑩シャバネ通り |
| ②オペラ・コミック劇場 | ⑪ダブキール通り |
| ③オペラ広場 | ⑫パサージュ・ショワズール |
| ④ヴィヴィエンヌ通り | ⑬フランス国立図書館リシュリユー館 |
| ⑤ヴィクトワール広場 | ⑭プティ・シャン通り |
| ⑥エティエンヌ・マルセル通り | ⑮モントルグイユ通り |
| ⑦カトル・セプターンブル通り | ⑯モンマルトル通り |
| ⑧ギャルリー・ヴィヴィエンヌ | ⑰リシュリユー通り |
| ⑨ギャルリー・コルベール | ⑱ルーヴォワ通り |
| ⑩旧証券取引所 | ⑲レオミュール通り |
| ⑪クレリー通り | メトロ |
| ⑫サンタンヌ通り | Ⓜ ₁ レオミュール・セバストポル |
| ⑬サン＝ドニ通り | Ⓜ ₂ サンティエ |
| ⑭サン＝マルク通り | Ⓜ ₃ ブルス |
| ⑮セバストポル大通り | |

①レオミュール通りのアパルトマン

レオミュール通りは2区の中央を東西に延びる長い通りです。立地も治安も良い地区です。

アパルトマンは19世紀末に建てられた馬蹄形の建物の2階でした。木の梁を活かした古民家風の重厚感と木の温もりがあり、歴史を感じさせます。中庭は住人との出会いの場でした。

幸運にも、最初と3回目の滞在のときに同じアパルトマンに住むことができました。

リビング・ダイニングルーム



②レオミュール通り散策

通りには、装飾的な建物が沢山あり、メトロのサンティエ駅の入口には、切り石、彫刻、金属的な装飾が見られます。

118番地の建物の全面は、アール・ヌーヴォー風の大きなガラス窓です。

124番地の建物の5階部分は、鉄とガラスのボウ・ウィンドー(弓型の張り出し窓)ですが、外付けのエレベーターが3台あるように見えます。

ときにはイースターの行列やデモ行進にも出会います。

サンティエ駅 - アール・ヌーヴォー風の窓



鉄とガラスのボウ・ウィンドー



イースターの行列 - LGBTのデモ行進



③リシュリユー通り周辺を歩く

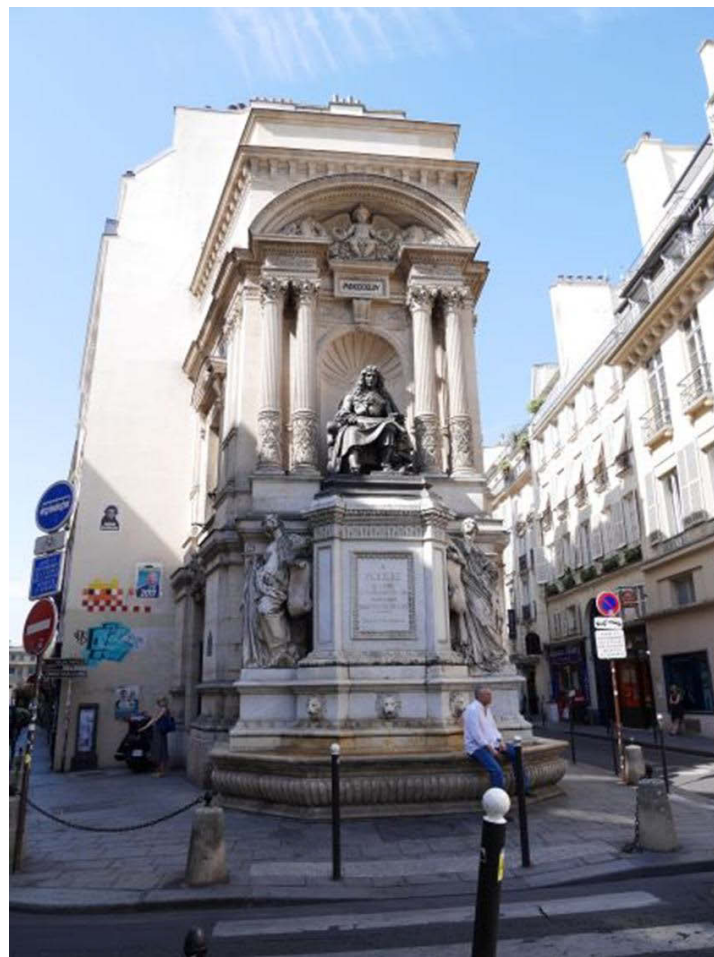
小さな通りを歩くことはパリの街の楽しさです。

リシュリユー通りもその一つですが、フランス国立図書館の前にルーヴォワ小公園があります。天気の良い日には、ベンチや芝生でお弁当やおにぎりを楽しむ姿が見られます。

噴水の4つの女神像は、フランスの四大河川、セーヌ川、ロワール川、ソーヌ川、ギャロンヌ川を表しています。

その少し先には、17世紀の劇作家モリエールの銅像があります。

噴水の女神像 - モリエールの銅像



④プティ・シャン通りを歩く

リシュリユー通りと交差するプティ・シャン通りの魅力はパサージュです。パサージュは、屋根がガラスで覆われ、空が見え、車の入らない「通り抜け」のことです。

19世紀の雰囲気漂うノスタルジックなアーケード街をイメージしてください。

通りには、ギャルリ・ヴィヴィエンヌ、ギャルリ・コルベール、パサージュ・ショワズールの3つのパサージュがあります。

クリスマス・イルミネーションに輝く ギャラリー・ヴィヴィエヌ



⑤パレ・ロワイヤル

パレ・ロワイヤルは1区ですが、プティ・シャン通りからすぐ近くにあります。ここはもともと王宮ではなく、『三銃士』に登場する枢機卿リシュリューの城館でした。

彼の死後、遺言によって王家に寄贈され、1642年にパレ・ロワイヤルと呼ばれるようになりました。

パレ・ロワイヤルは、ヴァロワ、ボジョレ、モンパンシエの3つの回廊に囲まれています。街の喧騒を忘れ、それぞれのときが流れる癒しの空間です。

満開の木蓮 - 噴水の周りでランチやお喋りを 楽しむ人たち



2.フランス国立図書館(BnF)

滞在中、自由に研究を続けることも私たちの目的の一つでした。午前中はそれぞれ違う図書館に通いました。

フランス国立図書館リシュリュー館、新館のフランソワ・ミッテラン館、そしてアルスナル図書館を紹介します。

①リシュリユー館

リシュリユー館は、1367年にシャルル5世によって創られた王室文庫でした。その後、ルイ14世の宰相マザラン卿の館となり、フランス革命後に国立図書館になりました。

歴史的建造物に指定されているラブルスト閲覧室(400席)は、建築家アンリ・ラブルストの設計で1868年に完成しました。

2011年からの改修工事で2016年にラブルスト閲覧室は美しく生まれ変わり、国立美術史研究所(INHA)の図書館になりました。

3階の舞台芸術展示室には、舞台衣装、仮面、絵画などが展示されています。

ラブルスト閲覧室 - 舞台芸術展示室



・サル・オヴァール(楕円の間)

リシュリュー館のサル・オヴァール(楕円の間)は建築家ジャン＝ルイ・パスカルによって20世紀初めに建設されました。

2017年からの改修工事が終わり、2022年に誰でもが無料で利用できる開架式閲覧室(200席)に生まれ変わり、文化との出会いの場になりました。

書棚には2万冊の書籍が並び、さらに9千冊のマンガを自由に読むことができます。

二階には美術館が新設され、フランス国立図書館所蔵の常設展をはじめ、ルイ15世のサロンやギャルリ・マザランの天井画は必見の価値があります。

開放的な楕円の間 - 「遊び」のコーナー



②フランソワ・ミッテラン館

フランソワ・ミッテラン館は、リシュリュー館の増え続ける蔵書を収めるために13区に建てられました。開館は1995年、翌年に一般公開されました。

見開きの巨大な4冊の本が立っているように見えます。中央に大きな中庭があり、地下に閲覧室があります。

地下1階(1593席)は一般向け、地下2階(2000席)が研究者向けです。

2006年に開通したシモーヌ・ド・ボーヴォワール橋は、二階建ての橋のため橋脚がないのが特徴です。この橋は左岸のフランソワ・ミッテラン館と右岸のベルシー公園をつなぎ、二つの岸の絆を表しています。

フランソワ・ミッテラン館 - シモーヌ・ド・ボーヴォワール橋



③アルスナル図書館

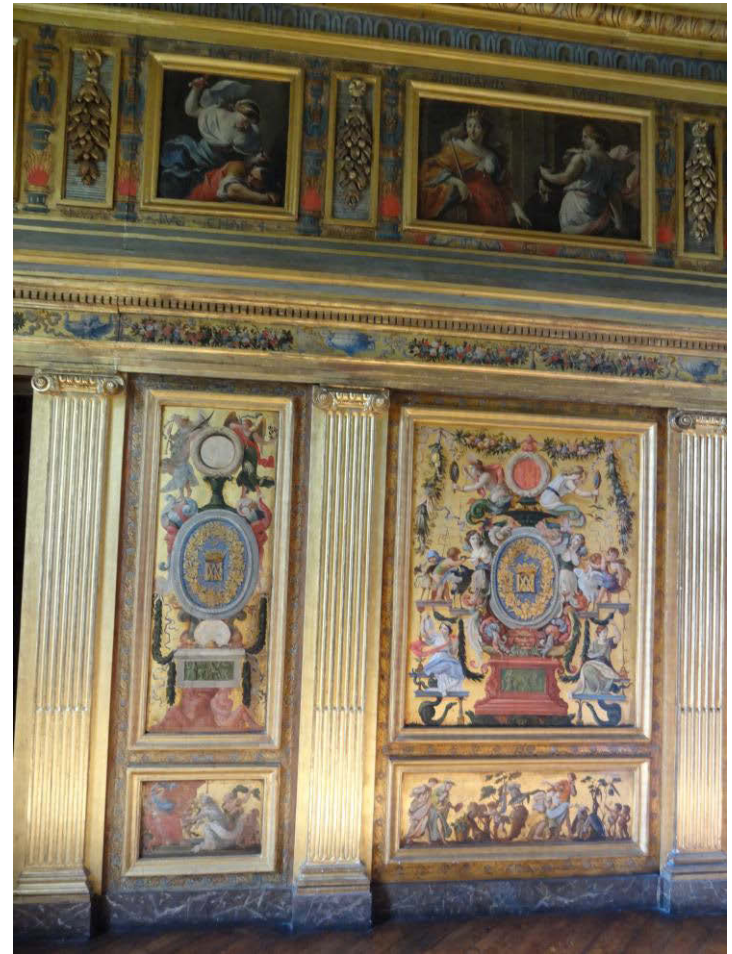
アルスナル図書館はもともと16世紀にルイ12世によって建てられた兵器庫でした。その後、シュリー公やラ・メイユレ侯爵ら著名人が住むようになりました。

18世紀中頃、政府高官で愛書家のポルミイ侯爵が住むようになり、自分の蔵書をすべて持ち込み、一般公開したことから現在の図書館になりました。

ここには文学、歴史学、書誌学に関する書物や文献が収められています。

ヨーロッパ文化遺産の日には、閲覧室以外の部屋が公開され、見事な壁画などを見ることができます。

閲覧室 - ラ・メイユレ侯爵の執務室



3. ヨーロッパ文化遺産の日

ヨーロッパ文化遺産の日は、欧州評議会と欧州委員会の合同イベントです。ヨーロッパの多くの国々で9月の第三週目の土日に開催されます。

その発端は、1984年に当時の文化大臣ジャック・ラングが提唱したフランス文化財「公開の日」でした。

通常は非公開の文化財や歴史的建造物、また美術館などを無料で見学できます。

国民議会(下院)、国立古文書館(歴史博物館)、フランス銀行を紹介します。

①国民議会（下院）

ブルボン宮すなわち現在の国民議会は、1720年にルイ14世の娘ブルボン侯爵夫人のために建てられた邸宅でした。1798年から国民議会の議事堂として使われています。

ブルボン宮に隣接するラッセイ館は、彼女の腹心の友ラッセイ伯と彼の父ラッセイ侯爵によって同時期に建てられ、1804年から国民議会議長の公邸になっています。

国民議会議正面



国民議会の図書館 - ラッセイ館の祝宴の間



②国立古文書館(歴史博物館)

国立古文書館は、1808年、ナポレオンの下、貴族の館が立ち並ぶマレー地区のスービーズ館を文書館に当てたことに始まります。現在は歴史博物館も兼ねています。

1821年に国立古文書学校が設立され、その図書館はリシュリュー館の中央書庫の奥、プティ・シャン翼にあります。

国立古文書館全景 - スービーズ館の一室



③フランス銀行

フランス銀行は、1800年にナポレオンによって貨幣の統一、国内の経済安定そして金融システムの強化を目指して創設されました。当初から紙幣の発行権をもつフランスの中央銀行としての役割を担っていました。

1811年にトゥールーズ伯爵邸に拠点が置かれました。邸宅は、ルイ13世の国務卿ラ・ヴリリエール侯爵が1653年に建築家マンサールに依頼したバロック風の館でした。その後、トゥールーズ伯爵がこの館を買い取り、ロココ風に改築しました。

宮殿のようなフランス銀行の「黄金の間」では折に触れてコンサートが開催されます。

フランス銀行の中庭 - 黄金の間



4. 美術館を訪ねて

パリには三大美術館をはじめ小さな美術館まで数えきれないほど美術館があります。

常設展はもちろんですが、滞在中はむしろ各美術館の企画力が発揮される意欲的な展覧会に関心がありました。パリにはおのずと世界中から素晴らしい名画が集まってきます。

ルーヴル美術館、オルセー美術館、国立近代美術館、フォンドシオン・ルイ・ヴィトンそして最近注目を浴びている美術館を紹介します。

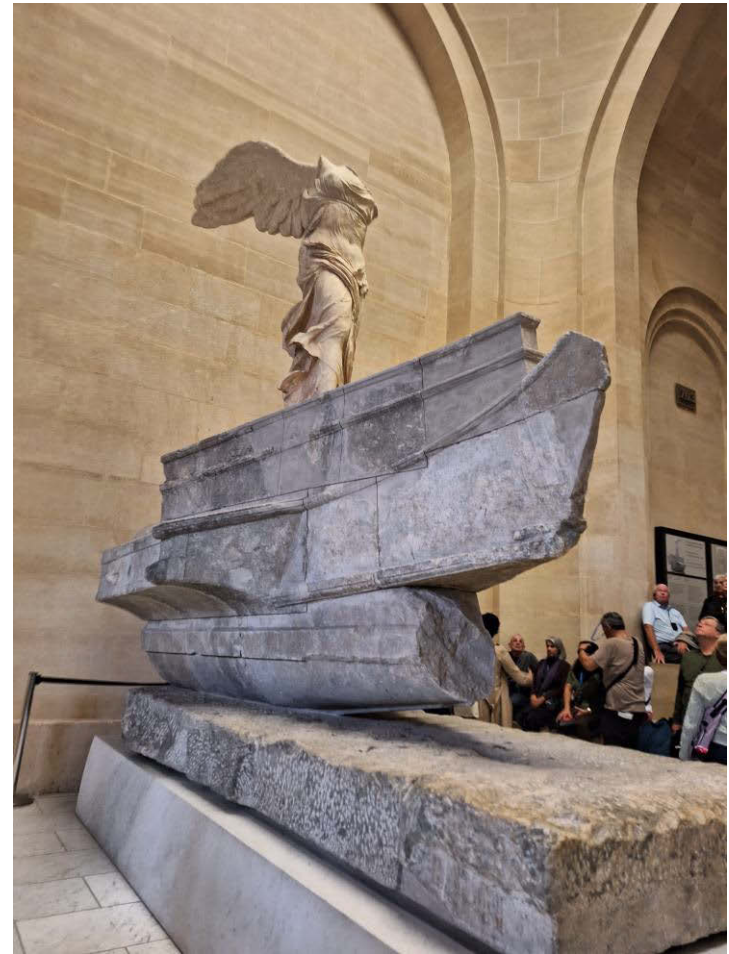
①ルーヴル美術館

ルーヴル宮殿が美術館として一般公開されたのは、フランス革命後の1793年です。ルーヴル美術館には古代から18世紀までの作品が展示されています。

約200年後の1989年にガラスのピラミッドが中庭に登場し、リシュリユ、シュリー、ドノンの3つの展示室を自由に行き来できるようになりました。2012年にランスに別館が完成しました。

2024年の入場者数は約870万人。その一方で館内の老朽化が進み、マクロン大統領は10年かけて大規模な改修・拡張工事を行うと発表しました。

ガラスのピラミッド - 台座にのった 「サマトラケのニケ」

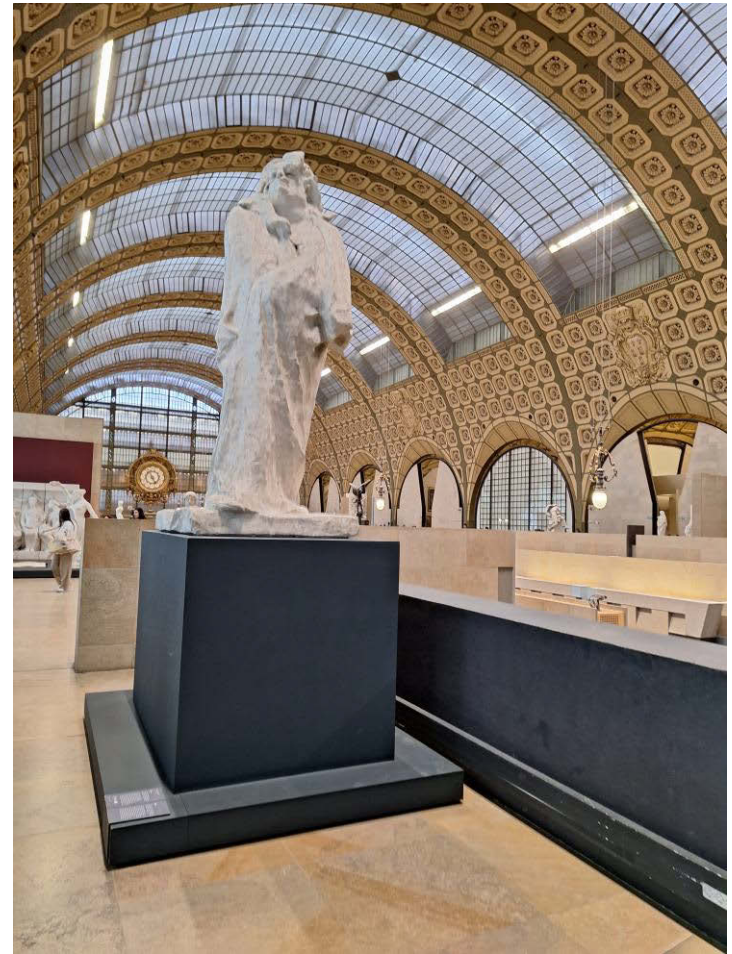
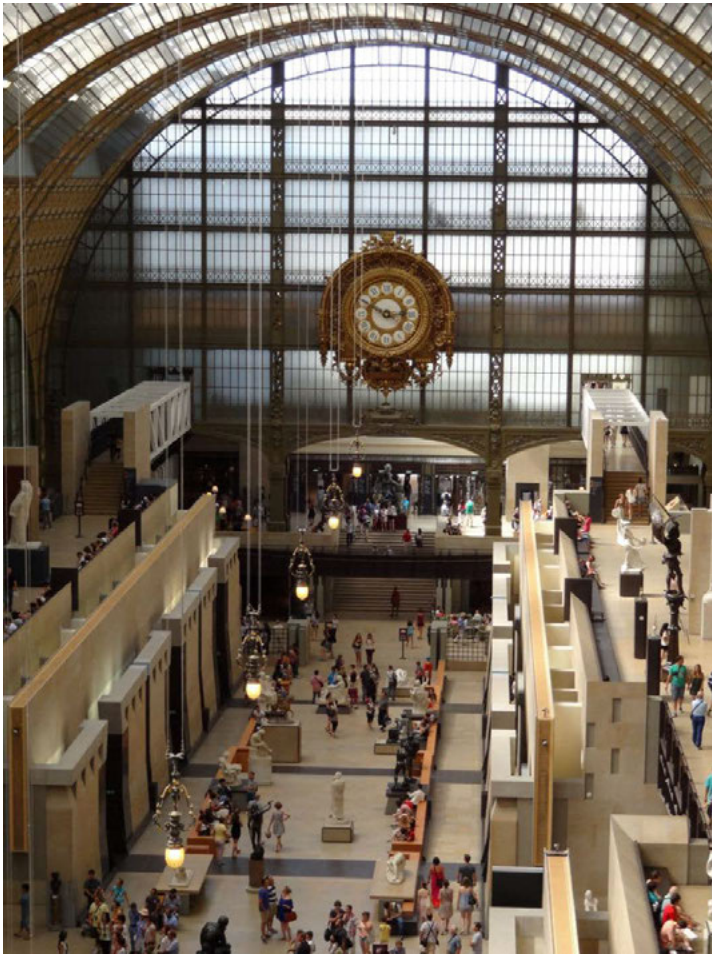


②オルセー美術館

オルセー美術館は 19世紀の作品を中心に展示しています。とくに印象派のコレクションは見事です。

1900年のパリ万国博覧会の際に、オルセー駅の駅舎が建てられました。その駅舎を改修して、1986年にオルセー美術館が誕生しました。館内には、当時の面影があちこちに見られます。正面の大時計もその一つです。

大時計 - ロダンのバルザック像



③国立近代美術館

国立近代美術館は、フォーヴィスムからシュールレアリスム、そして現代までの作品を展示しています。

1977年に開館したポンピドゥー・センターの5階から7階が美術館ですが、外観は配管をむき出しにした奇抜なデザインです。

当時、度肝を抜かれた人は少なくはありませんでした。今でも驚く人がいるでしょう。しかし、レアル地区に溶け込み違和感はありません。

ポンピドゥーセンター - 国立近代美術館



④フロンダシオン・ルイ・ヴィトン

フロンダシオン・ルイ・ヴィトンは、美術館というよりはむしろイベント会場です。2014年に、建築家フランク・ゲリーの設計でブローニュの森に誕生しました。

当初、外観はカラフルなガラスパネルに覆われていました。その斬新なデザインには目を奪われましたが、2017年に本来の白に変わりました。

シチューキン・コレクション展、パリのMoMA展、マーク・ロスコ展はとくに印象に残っています。

カラフルな外観 - 白い外観



⑤ブルス・ドウ・コメルス - ピノー・コレクション

ブルス・ドウ・コメルスは、18世紀から穀物の取引所や商工会議所として使われてきました。大富豪のフランソワ＝アンリ・ピノーと建築家の安藤忠雄によって、2021年に現代美術館に生まれ変わりました。

歴史的建造物のドームを生かした4階建ての館内は、19世紀に造られたガラスの円天井から光が差し込む、巨大な吹き抜けの空間になっています。

展示物はピノー・コレクションの他に、企画展が随時催されます。

ブルス・ドゥ・コメルス正面 - 天井のフレスコ画



⑥カルナヴァレ美術館 - パリ市歴史博物館

マレー地区のカルナヴァレ美術館は、17世紀の女性作家セヴィニエ夫人の邸宅でしたが、19世紀にパリ市の歴史博物館になりました。約5年の改修工事が終わり2021年にリニューアルオープンしました。

時系列に並べられた先史時代から現代までの展示物を見ていると、パリの歴史そして時代とともに変化してきた市民の暮らしを肌で感じることができます。

店の看板、フランス革命の関連資料、プルーストの寝室の再現など興味深いものが多々あります。

店の看板 - コメディア・デラルテ



5. コンサートの悦び

パリには世界中から一流の演奏家が集まります。指揮者のバレンボイム、ロンドンを拠点に活躍している内田光子、ローザンヌ室内楽とルノー・カプソン、ロンドン交響楽団とサー・アントニオ・パッパーノなどは、ほんの一例です。

聴衆も各国からやって来ます。評判の高いコンサートはチケットがすぐ完売になります。開演時間はふつう午後8時半ですが、8時のコンサートホールもあります。

主なコンサートホールはサル・プレイエル、サル・ガヴォー、シヤトレ劇場などいくつもありますが、そのなかでシャンゼリゼ劇場とフィラルモニーを紹介します。

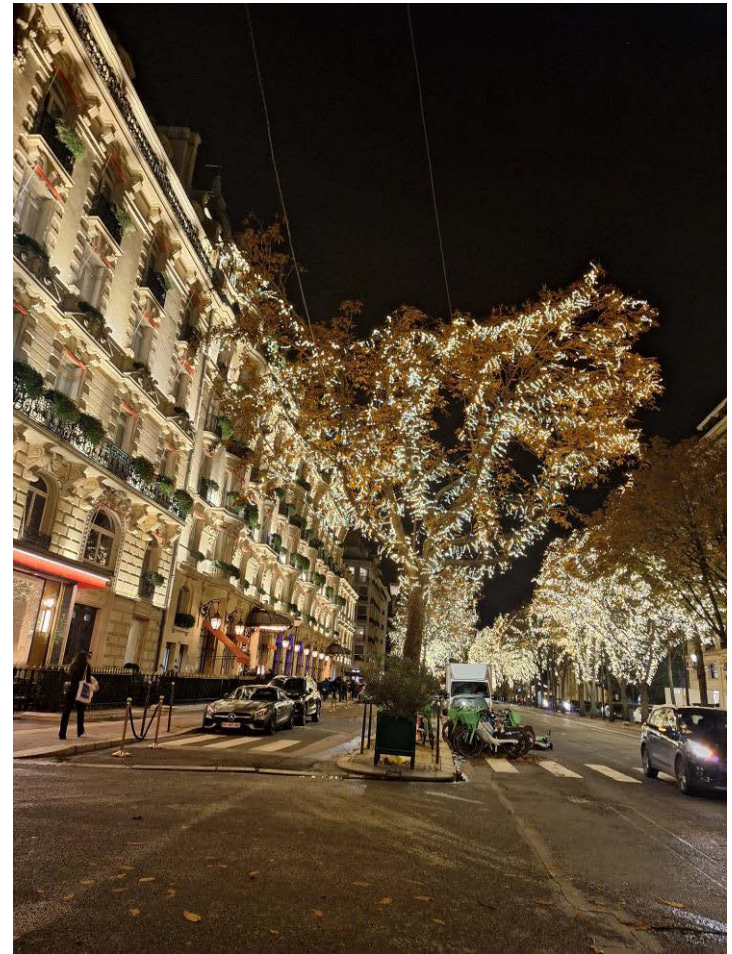
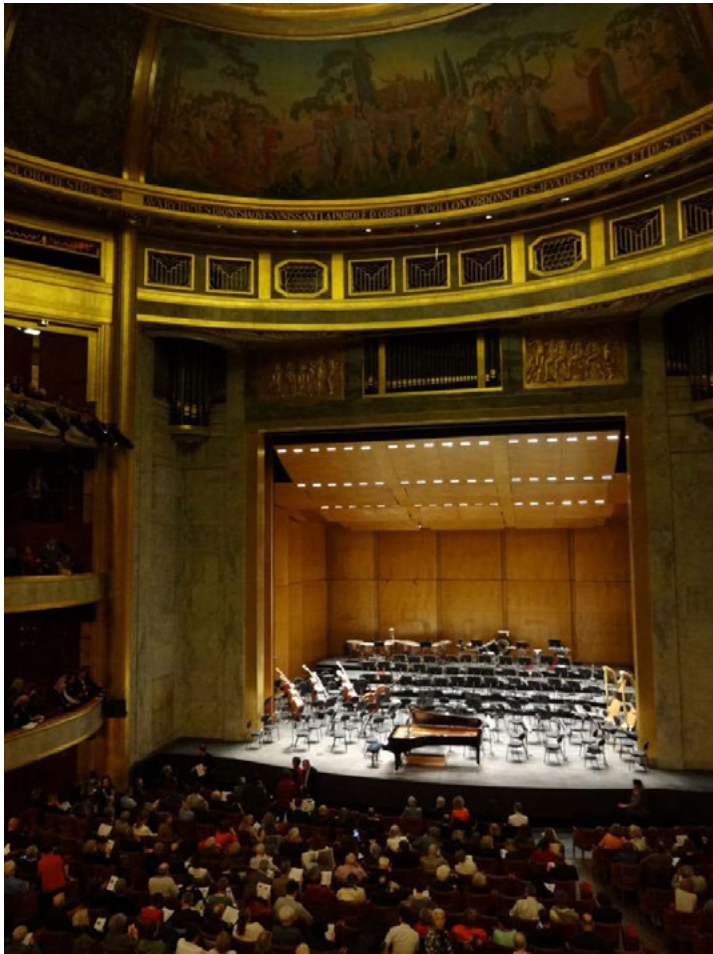
①シャンゼリゼ劇場

シャンゼリゼ劇場は、高級ブティックやアテネ・プラザホテルが並ぶモンテーニュ大通りにあります。一年分のチケットを予約できるのが特徴です。この劇場では案内係にチップをあげるのがマナーでしたが、最近はなくなりました。アルマ広場のカフェでは演奏家と出会うこともあります。

日曜日の若手演奏家によるコンサートは、午前11時から始まります。予約の必要はなく、ふと思い立って行くと楽しい一時を過ごせます。

11月中旬のコンサートはクリスマスシーズンの始まりです。終演後、外に出ると、モンテーニュ大通りはイルミネーションに輝いていました。

満席の会場 - モンテーニュ大通り



②フィラルモニー

フィラルモニーは、2015年にジャン・ヌーヴェルの設計でパリの北東、ラ・ヴィレット公園の中に誕生しました。パリ管弦楽団の新拠点です。シルバークレーの外観、そして大きな波がうねるような大ホールは実に現代的です。

演奏が終わると、アンコールに聞き入る人たちもいれば、その一方で家が遠い人たちは席を立ち始めます。

当日券は開演30分前に、28歳未満と65歳以上、また失業者や生活保護を受けている人に特別料金で提供されます。

フィラルモニー正面 - ポリーニのコンサート



6. オペラの楽しみ

オペラシーズンは、9月上旬から翌年の7月中旬までです。開演時間は午後7時半から8時、幕間の休憩時間が30分ほどあります。

シャンパンを飲んだり、軽食をとったり、劇場内を廻りながら建築様式、天井画や壁画を見るのも幕間ならではの楽しみです。

服装は、オペラ座の平土間席でもタキシード姿や着飾った人を見かけるのはまれであり、その意味でもオペラは特別のものではなく、幅広い層に定着しています。

オペラハウスはいくつかありますが、そのなかでパレ・ガルニエとオペラ・バステューユを紹介します。

①オペラ座（パレ・ガルニエ）

オペラ座は17世紀にリュリによって創られた「王立音楽アカデミー」がもとになっています。現在のオペラ座は、ナポレオン三世の下、シャルル・ガルニエの設計で1875年に完成しました。その名をとってパレ・ガルニエと呼ばれます。当時、最大のオペラハウスの誕生でした。

ヴェルサイユ宮殿の鏡の間を思わせる豪華絢爛な大広間は、かつては社交の場としての役割が高く、貴婦人たちが衣装を競い合っていました。今は当時の面影は全くありません。

観客席のシャガールの天井画は、画家の意思を尊重して、前の天井画の上に取り付けられています。パリを象徴するエッフェル塔や凱旋門が描かれています。

オペラ・バスティーユが1989年に完成してからは、バレエの公演が中心になりました。

大広間 - シャガールの天井画



②オペラ・バスティーユ

バスティーユ広場は、1789年7月14日、バスティーユ牢獄を襲撃し、フランス革命が始まったところです。革命200周年を記念して、バスティーユ広場の目の前、庶民的な地区に当時のミッテラン大統領の建設計画の下、1989年に完成しました。

地上7階-地下6階建てのオペラ・バスティーユは、巨大なオペラハウスの誕生と言えるでしょう。その外観はモダンなガラス張りです。

観客席はどこからも舞台が見える設計になっています。立見席もあり、子ども連れの人、仕事帰りの人も多く、オペラの大衆化と言えます。

バスティーユ広場 - オペラ・バスティーユ



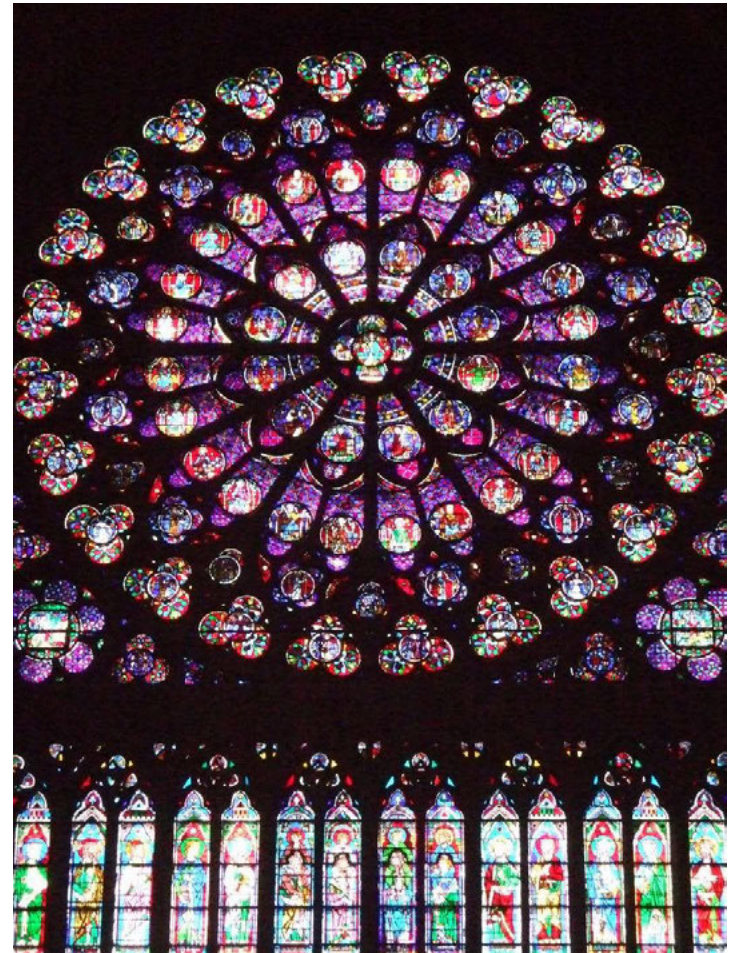
パリ市民の心のよりどころ

2019年4月15日、ノートルダム大聖堂から火の手が上がったとき、周辺にいたパリ市民は思わず聖歌を歌いながら祈り続けました。尖塔と屋根は崩落しましたが、幸いにも聖遺物と文化財は被害を免れました。消防隊員の必死の消火活動により鎮火は翌日10時でした。

5年8か月の再建・修復工事を経て、2024年11月29日、一般公開(12月8日)の前にマクロン大統領は修復に携わったすべての人たちを招いて内部を公開しました。

ノートルダム大聖堂は、信者であろうとなかろうとパリ市民の心のよりどころであることを改めて知ることにになりました。

ノートルダム大聖堂側面 - バラ窓



おわりにかえて

パリ市の紋章の標語には次のように書かれています。

Fluctuat nec mergitur
「たゆたえども沈まず」

パリ同時多発テロ、シャンゼリゼ大通りでのテロ、ノートルダム大聖堂の火災などパリは困難をいくつも乗り越えてきました。人々の心にはいつも「たゆたえども沈まず」の精神が生きています。

古いものと新しいものが共存し、調和しているのがパリの姿です。

参考文献

佐藤浩子 『レオミュール通りの日々 定年後、パリに暮らして』 パド・ウイメンズ・オフィス、2019年。
—— 講演「レオミュール通りの日々 定年後、パリに暮らして」 川村英文学会、2021年9月18日。
La Bibliothèque nationale de France Site Richelieu, Beaux Arts & Cie, 2022.

写真は筆者が撮ったものです。

パリ市庁舎 - パリ市の紋章

